様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６４８
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５０４７２

研究課題名（和文）家庭内衣服行動の変容から考える現代の家族・生活の研究

研究課題名（英文）Study for family life on the chenge of clothes in the family

研究代表者
山村　明子（YAMAMURA, AKIKO）

東京家政学院大学・現代生活学部・准教授

研究者番号：６０２７９９５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円、（間接経費）　　300,000円

研究成果の概要（和文）：　家庭では、寛ぎ、就寝、家庭内労働などのための衣服が着用される。その衣生活は身近でありながら、個々の生活の中に隠されたものである。本研究の目的は家庭の中の衣生活の変容から、家族関係、生活空間・時間の多様性といった、家庭生活の在り方を明らかにすることである。家庭内労働用のエプロンについて、第二次大戦以降の着用実態から家事労働とそれを担う人との関わりを分析し、衣服が生活に及ぼす力を考察した。
　女性による家事労働が前提であるエプロンは、その女性性が強調され、それを否定するために、着用減少の要因になった。しかし、1990年代以降の家庭内の男女協同が前提となったエプロンは、家族の親和性を高めている。

研究成果の概要（英文）：　Within the family, we wear clothes mainly for relaxation, sleeping, and domestic chores. Since those clothesare seen only by family members, so those garments are hidden inside the lives of indeviduals. The author believes that based on past transformations in clothes worn within families, is it possible toclarify the ideals of family life. I take up the apron as a garment of domestic labor for housewives. Based on the frequency of wearing the apron after the Second World War, I will clarify the ideals of domestic chores within families and for those who play a central role in domestic labor, and examine the power of clothing upon one's everyday life.
　Because the feminine aspects of the apron, which ussed to be premised on housekeeping labor by women, were sometimes overemphasized or denied, it consequently helped it become somewhat obsolete. On the other hand, because gender equality is assumed in the family, the apron helped strengthen the bonds among family members.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学　生活科学一般

キーワード：衣生活　家庭生活　エプロン

１．研究開始当初の背景

家庭で着用される衣服のカテゴリーには、部屋着（家庭内でくつろぎのための衣服）、寝衣（就寝時の衣服）、エプロン（家庭内労働用の衣服）、などが挙げられる。これらが私たちの日常生活の中でどのように受容されてきたかについての研究報告は極めて少ない。例えば、日本及び西洋の通史的な調査・研究はなされている（睡眠文化研究所：ねむり衣の文化史―眠りの装いを考える，2003 年）。しかしながら、着用者の家族関係、ライフスタイルなどとの関連性において検討された研究は発表されていない。また、今日の衣生活の実態調査の中で、部屋着や寝衣の着用調査の報告例は見受けられるが、現代日本が内包する家族・家庭の脆弱化という問題に対して、衣生活の面からアプローチしたものではない。

家政学の視点に立脚して、人間形成の重要なステージである、家族・家庭という最小限の生活共同体の中の衣服行動を研究することは、今日の日本社会が内包する生活に根ざした問題点を解明できると、想定した。

２．研究の目的

第二次大戦以降の、日本の家庭内での時間消費における衣生活の変容に着目し、そこから今日の家族・生活に包含される問題について検討する。家庭内における衣生活は、日常的な行動であり、必要不可欠なものである一方、外部への開示性が乏しいため、これまでの服飾史研究においては、取り上げられることが少なかった。本研究の取り組みは家庭の中の衣生活を検討することで、今日の家族・家庭生活の変容もその原因の一つに関与していると推定される、精神性の未熟さが目立ち、円滑な人間関係を構築できない若者といった日本社会が抱える問題点について、新しい視点を示唆することが可能であると考える。

３．研究の方法

第一には第二次大戦後に発行された「家庭用実用雑誌」を中心とした調査である。これらの読者対象は家庭の運営をになってきた女性（主婦）であり、家庭生活の様子を伝える記事であることから、重要な資料となる。本研究では主として『暮しの手帖』（暮らしの手帖社発行）を利用した。ファッション提案ではなく、日本各地の家庭生活の様子を取材した記事から、各時代の主婦の姿を抽出した。また、『主婦の友』（主婦の友社発行）『婦人之友』（婦人之友社発行）も参照した。

第二には戦後の衣生活を大きく変えた既製服産業の情報として、繊維・ファッション業界専門紙を調査する。本研究では『繊研新聞』（繊研新聞社発行）を利用した。家庭内用衣服については、戦後間もない頃は家庭内裁縫にて調達されることが多かった。しかし、大量生産による既製服時代を迎えた 1970 年代以降には、これらの衣服もまた既製服によって調達されることが主流になったためである。

第三に、『朝日新聞』、『読売新聞』に掲載された記事から、衣生活を分析する。これらからは時代に応じた衣服の提案だけではなく、生活者の意識や姿を分析することが可能である。

これらの調査、分析をもとに衣生活から 21 世紀の家庭生活の在り方を検討する。

４．研究成果

家庭の中の衣生活の中で、特にエプロンに焦点を絞り、調査研究を進めた。

家庭では、くつろぎ、就寝、家庭内労働などのための衣服が着用される。それらは、家族などにしか目に触れることないため、その衣生活は身近でありながら、実態は他者の目には触れられず、個々の生活の中に隠されたものである。筆者は家庭の中の衣生活の変容から、家族関係、生活空間、生活時間の多様性といった、家庭生活の在り方を明らかにすることが可能であると考えている。本研究では主婦の家庭内労働の衣服としてエプロンを取り上げ、第二次大戦以降のエプロンの着用実態から、家庭内での家事労働や、家事労働を担う人の在り方とを明らかにし、衣服が生活に及ぼす力を考察する。

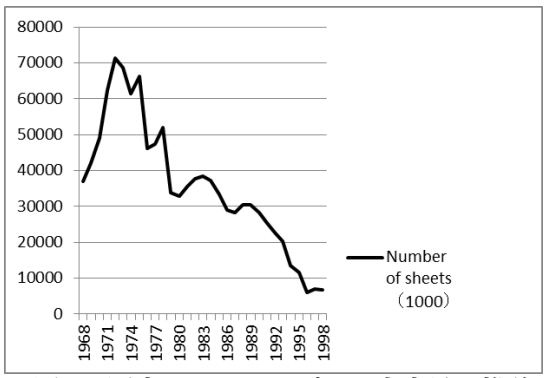

図１：国内におけるエプロン生産量の推移

上記のグラフからわかるように、1960 年代末から 1990 年代末までの、エプロンの国内生産枚数は 1972 年の 71320 千枚をピークに、以降減少傾向が続き、1998 年には 6629 千枚へと落ち込んでいる。この背景には、日本市場に国外で生産された安価な衣料品が輸入されていることも一因ではあると考えられるが、エプロンの市場自体が大幅に縮小していることは明白である。1970 年代前半には、エプロンメーカーによるエプロン専門店の出店 や、エプロンだけのファッションショーの開催 を報じる記事が掲載され、多彩な色柄のエプロンが多数商品化されていることが報じられている。その後のエプロン市場が縮小すると、エプロンメーカー自体が「エプロンはもう売れないアイテムになった」と認識していた 。

1950 年代以降、エプロンは家庭内労働の場面だけではなく、家庭内での寛ぎ、家庭外での近隣の人たちとのコミュニケーションの場面で着用された。これらからエプロンは家事労働の為の機能的な衣服、という位置づけではなく、主婦の日常着としての側面が見いだされる。1990 年以降にはエプロンの出現の頻度や取り扱われ方は変化している。

エプロンの着用が減少した背景は以下の三点である。

第一は家事労働の軽減である。家事全般においてエプロンが着用された時期には、家事は重労働であり衣服を汚してしまう作業でもあった。しかし家事の簡便化は労働を軽減し、必ずしもエプロンを必要とはしなくなった。

第二は衣服に対する価値観の変化である。カジュアル衣料の普及は、日常着が汚れることに対する抵抗を減少させた。また、安価な衣服の普及、衣服の所持枚数の増加は、結果として衣服を保護する意識を低下させ、エプロンによる保護の必要性を薄れさせたのではないのかと、推察した。

第三はエプロンのイメージである。1950 年代以降、エプロンは主婦や女性としてのイメージを形成する役割を担っていた。エプロンを着用し、家事にいそしむ姿は家庭内での愛される主婦象を形成していた。しかし、固定的な女性性を示すエプロンのイメージは、エプロンを消失させた一因となったと考える。女性の社会活動の拡大や男性の家事が広がる 1990 年代からエプロンの女性性に対する意識化の否定がなされている。このことからエプロンをしないことと、家事が軽減されていることとが必ずしも同列で語られることではないと考えた。

次に男性とエプロンとの関わりを検討した。男性の家事参加は 1960 年代の新聞記事にも掲載されているが、男女参画社会基本法（1999）以降の社会の動向を踏まえ、男性がより積極的に家事・育児に携わる姿勢も広がっている。家事労働におけるジェンダーフリーが拡大していると言えよう。

男性のエプロンについての記事を検討してみると、1991 年の記事では、結婚祝いに男女兼用型のペアのエプロンが選ばれていることを報じている 。人気のデザインは「腰の絞っていない大きめの物、無地やストライプ柄、DC ブランドもの」とあり、装飾性の少ないものの売れ行きが良いことも伝えている。日常的なスタイルとしてスポーティカジュアルが採用され、ファッションのユニセックス化に伴い、エプロン自体も男女ともに抵抗なく着用できるユニセックスデザインが採用されている。さらに、1990 年代末から 2000 年代にかけて、男性用エプロンも登場している 。アパレルメーカーの荻原が販売する男性用エプロンは「リボンは後ろではなく、前で結ぶタイプ」になっており、色・素材以外に形状にも特徴がある。その理由は「後ろでリボンを結ぶのは、いかにもエプロンという印象が強く、男性には抵抗があるよう。板前のように前で結べば気持ちも引き締まり、気合が入る」からと解説されている 。プロの調理人の仕事着をイメージすることで、家事を格好良い仕事へと格上げしている。男性が主体的に家事に取り組む方法を取材した記事では、男性の好みを反映したエプロンや家事の道具を取り入れること提案している 。男性のエプロンは家事を楽しく、格好良くこなすための装置となっている。

2000 年代にはエプロンと家事を肯定的に結び付ける意見（エプロンをすることで今日も家事をするぞ、と張り切って、浮き浮きする）もあれば、対照的な意見もある。さらにエプロンに優しさ、親しみやすさをイメージしている事例も見られた。従来のエプロンのイメージであった主婦や母の姿から、人はそこに「優しさ」を見出しているのであろう。それ故に、エプロンには性別を問わず着用者の印象を親しみやすいものにする効果があることが認められた。また、2008 年から巣ごもり消費とよばれる、外出せずに家の中での生活を楽しむ消費傾向がみられる。ホームパーティや、料理、フラワーアレンジメント、テーブルコーディネイトの習い事などの場面で、エプロンをおしゃれに楽しむことが目的で、販売数が伸びているという 。エプロンは家庭生活の充実を表象している。

女性による家事労働が前提であるエプロンは、エプロンの女性性が強調され、それを否定するために、姿を消す要因になった。しかし、家事労働においても男女共同が前提になると、エプロンは女性固有のイメージから脱却している。

以上の動向から、エプロンは家事労働のみならず、家庭生活の場面を豊かに彩る衣服、そして人への安らぎや親しみを与える衣服として、心豊かな生活と家族関係を作り出す力を持つと結論付ける。

エプロンに関する検討事項を踏まえて、本研究課題について言及する。エプロンを着用する生活シーンを創出していくことは、家族の家事への協働、心豊かなライフスタイルの創出といった、生活への積極的な姿勢を演出する一助となる。第 2 次大戦以降の高度経済成長期を経て、今日に至る日本社会における生活にかかわる問題は多様である。家族構成・家族関係の変化（核家族化・単身居住者の増加に伴う衣服のマナー意識の変化）、生活空間の変化（公私の区別が希薄になる）、生活時間の変化（就労，戸外活動時間の増加により、室内での活動時間の軽視）といった様々な問題が浮かび上がってくる。家庭内での衣服行動を考えることは、生活の質とは何か、家族の生活への意識を問い直す契機となるであろう。衣生活についての教育、より一層家庭生活を積極的に楽しめるファッションの提案、といったことを通して、これからの生活の質を向上させることが求められる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１　件）
Akiko Yamamura: Clothes in the family －The apron generate family life, 16th Annual conference for the International Foundation of Fashion technology Institutes, 2014（発行予定）
〔学会発表〕（計２　件）
① Akiko Yamamura: Clothes in the family －The apron generate family life, 16th Annual conference for the International Foundation of Fashion technology Institutes, 2014.01.30. 文化学園大学
② 山村明子：エプロンにみる家庭の中の衣生活,（一社）日本家政学会第 65 回大会, 2013.05.19. 昭和女子大学

６．研究組織
(1)研究代表者
山村明子（Akiko Yamamura）
東京家政学院大学・現代生活学部・准教授
研究者番号：60279958

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：